

椿古墳群 3号墳の調査について

高梨俊夫

1. はじめに

椿古墳群は袖ヶ浦市大鳥居から木更津市椿にかけて所在する。小櫃川南岸の標高30~50mの丘陵上に立地し、痩せ尾根に沿って東西約1kmにわたり総数45基を数える古墳群である。今回、東関東自動車道(千葉・富津線)の工事に伴い、南北に抜ける路線にかかる11基の古墳が調査対象となり、1991年1月から1992年7月まで発掘調査を行った。調査の結果、古墳時代前期の方墳1基と後期の前方後円墳1基・円墳9基のほか、弥生時代後期の方形周溝墓等を検出し、出土遺物等に注目すべきものがある前期の方墳(3号墳)について概要を報告したい。

さて、椿古墳群の所在する小櫃川流域は出現期古墳として紹介されている滝ノ口向台古墳群(註

1)をはじめとして非常に多くの古墳が築かれている地域である。また、小櫃川の対岸に位置する芝野遺跡では弥生時代後期の水田跡が検出されており(註2)、生産基盤である水田開発が弥生時代後期には平野部までおよび、さらに古墳時代には広域化していたことが予想される。この耕地のみならず、東京湾をも視界に入れることができる丘陵先端部に位置する3号墳とはどのような性格の古墳なのだろうか。

2. 3号墳の概要

墳丘と主体部

方形の墳丘裾での規模は、南北18m、東西19mで北西コーナーを2号墳(円墳・後期)の周溝でやや削られているが、ほぼ原形を留めていると思



第1図 小櫃川中下流域の出現期~前期古墳分布(S=1/100,000)

われる。南辺は丘陵尾根を切断する周溝となるが、底面が水平ではなく、中軸線よりやや西に両側からせり上がり、陸橋状のものを意識した掘削がなされている可能性がある。他の3辺は斜面を削り出し、墳丘裾からテラス状に削平されているため周溝はない。墳丘の高さは裾から（南辺を除く）約4mであり、約1.2mの盛土が認められ、以下は地山成形によるものである。盛土の構築方法は、1)旧表土を水平に造成、2)第1主体部を包囲するように土塁状の盛土を行う、3)木棺を設置し周囲を粘土で固定、4)黒色土と黄白色粘土の版築で完成させる。盛土に使用された土は、黒色土系、黄白色粘土系、褐色砂礫土系であり、これらは周囲の地山から採集可能であるため、墳丘裾を削り出した際に出る土を利用しているものと思われる。表土を除去すると墳丘裾には墳頂部から転落したと思われる土器（第3図1～5）が検出された。

主体部は墳頂部（第1主体部）と墳丘裾部（第2主体部）の2か所で検出されている。

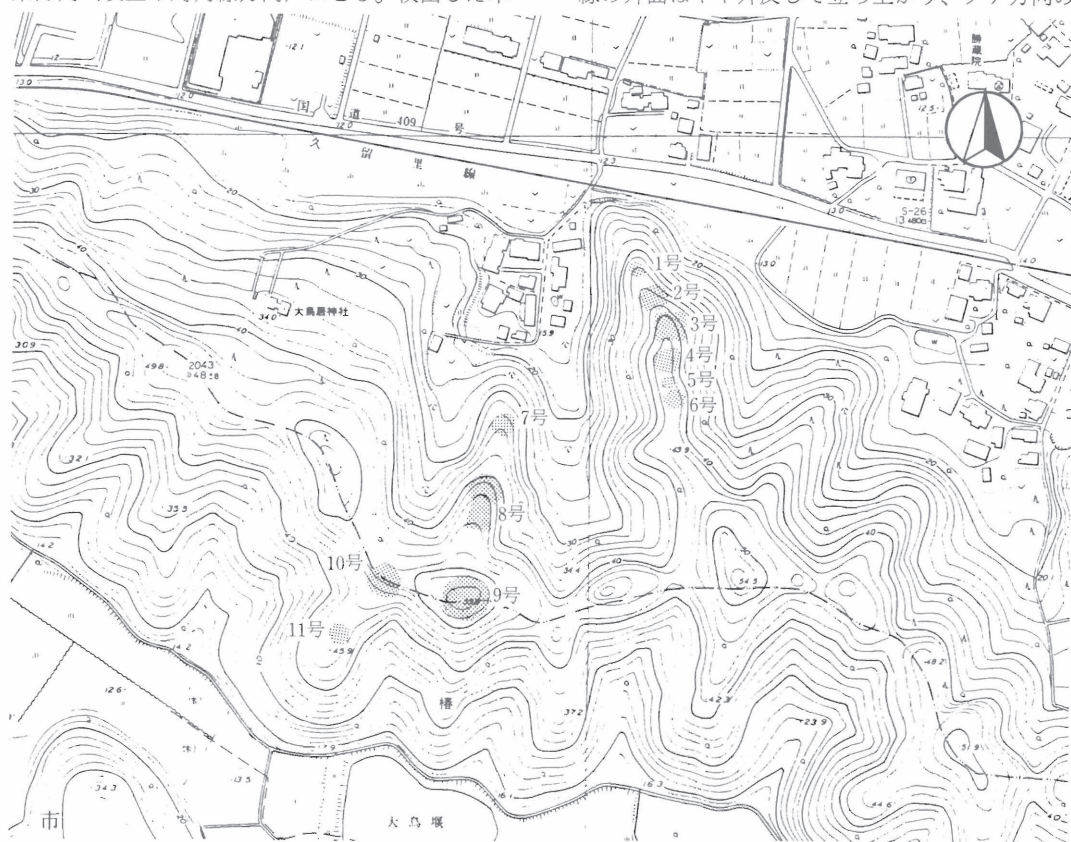
第1主体部は墳丘の中心部に位置し、主軸を北東方向（墳丘の対角線方向）にとる。検出した木

棺痕跡から判断して、舟形木棺の直葬と思われる。掘形は長さ4.2m、幅1.1m、木棺痕跡は長さ3.4m、幅0.7m、棺底の断面は緩いU字形で、いわゆる舟底形を呈す。遺物はすべて木棺内から検出され、槍1、剣1（鉄製）、銅鏃2、管玉2、ガラス小玉17が確認されている。

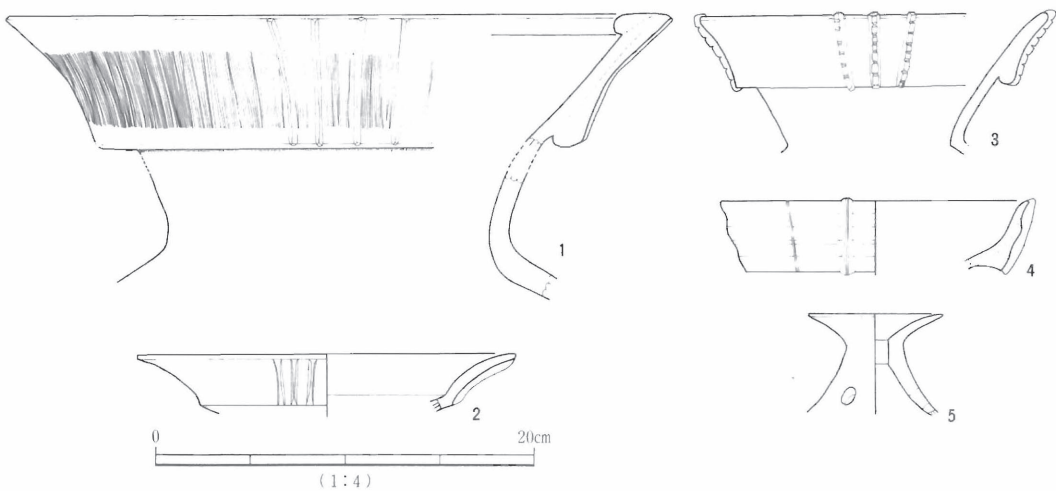
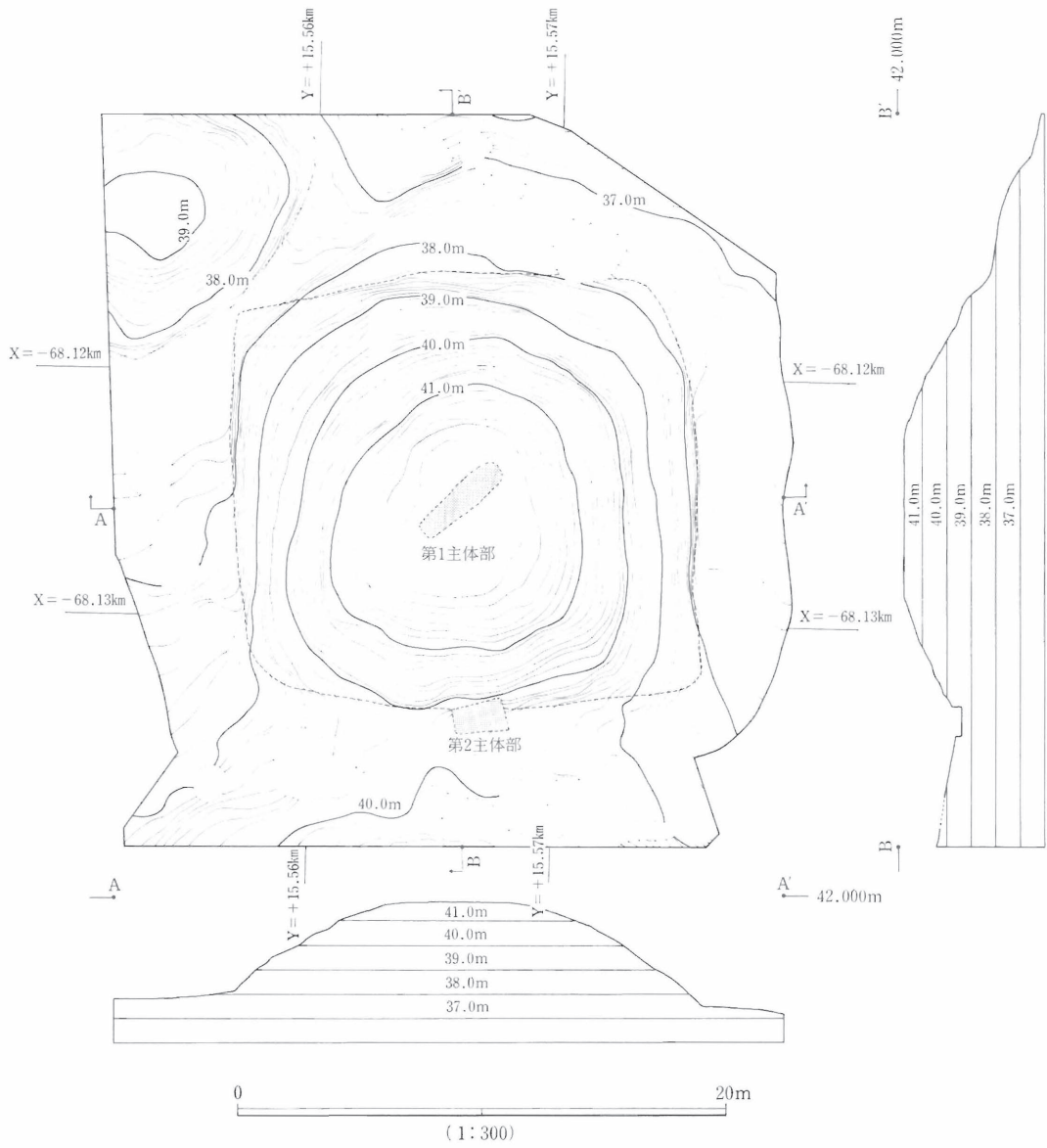
第2主体部は墳丘の南側裾に位置し、主軸を東西方向にとる。箱形の木棺の痕跡を確認したが構造は不明である。掘形は長さ2.4m、幅1.4～1.5m、木棺痕跡は長さ1.7m、幅0.6～0.7m。木棺内からは遺物が検出されなかったが、棺外から壺形土器（第4図23）が完形で検出されている。

墳丘裾部出土遺物（第3図）

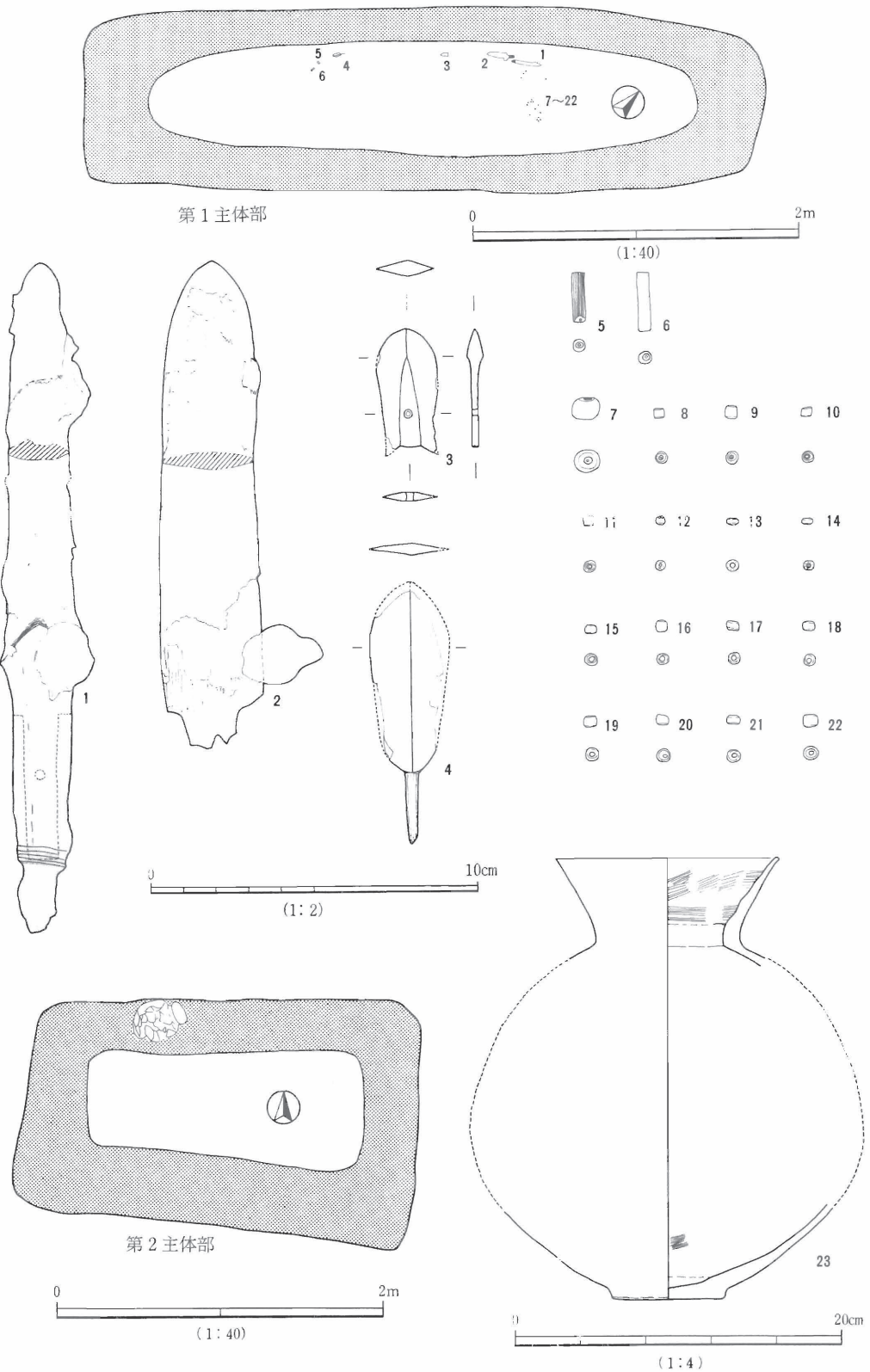
復元等、本格的な整理作業がなされていないため、主要なものを復元実測している。よって、今後追加資料の可能性があることを考慮していただきたい。また、当古墳出土の土器は器面の剝離等、状態が悪く、調整痕の観察が困難なものが多い。1は口径35.2cmの大形の壺である。複合口縁の外縁はやや外反して立ち上がり、タテ方向の



第2図 椿古墳群内調査対象古墳（S=1/5,000）



第3図 樁3号墳墳丘測量図・墳丘裾部出土遺物



第4図 主体部と出土遺物

ハケ目調整の後、上下端をナデ消している。口唇内面には突帯が巡り、上端に約2.5cmの平坦面を形成している。口縁部に4本1組の棒状浮文、図示していないが肩部に羽状縄文の間に波状沈線と円形浮文が施文されている。色調は淡褐色で、胎土は砂粒を多く含み粗い。2は有段口縁の壺だと思われる。口径20cm、大きく外反する口縁部外面には3本1組の棒状浮文が見られ、赤彩されている。3は複合口縁の壺である。口径18.4cm、3本1組の刻み目をもつ棒状浮文が4単位施文され、赤彩が認められる。4は壺の口縁部であり、内面がやや内湾して立ち上がり、受口状を呈す。外面には沈線および棒状浮文の双方がみられる。赤彩。5は小型の器台である。口径7.2cm、脚部に円形透孔が3か所ある。赤彩。

第1 主体部出土遺物（第4図）

1・2は鉄製品であり、身の細さから1を槍、2を剣と判断する。切先を違える出土状況から、1なら2m近くの長柄の装着を想定することが可能である。1は柄と思われる木質が付着し、遺存している全長は20.6cm。X線撮影によって確認された槍先部分は全長18.4cm、身長13.9cm、最大刃幅2cm、莖長4.5cm。2は遺存する全長は15cm、身長13.9cm、最大刃幅3cm、莖長1.1cm（遺存）。共に両関で、莖に一孔を有する。

3・4は銅鍔である。3は無莖式で全長3.9cm、わずかな逆刺があり、矢柄の装着部分に小孔を穿っている。4は有莖の柳葉式であり、全長8cm、身長5.8cm、莖長2.2cm。

5・6は管玉である。5は暗赤色を呈する鉄石英製で長さ1.5cm、径3.5mm。表面に細かい稜が観察される。6は緑色細粒凝灰岩製で長さ1.8cm、径3.5mm。淡緑色で表面は平滑である。

7～22はガラス玉であり、7・8がコバルトブルー、他はスカイブルーを呈す。大きさは7のみ径8mmでその他は径3～4mm。なお図示した以外にも破砕したスカイブルーの玉、1個を検出している。

第2 主体部出土遺物（第4図）

23は壺形の土器である。口径13.8cm、器高27cm、底径7cm、最大胴径24.2cm。外傾する素口縁と球形胴をもち、底部内面はややくぼむ。調整は内面

にハケ目が見られるが、外面は不明。

3. 出土遺物の検討

土器 現時点で壺5、器台1を確認している。特徴的なものでは第3図1の壺がある。これは東駿河地域の大廓式の系譜にならぶと思われるものである。大廓式の壺は口縁部の立ち上がりが直立から外傾へ、口縁部外面の棒状浮文が沈線へと変化するようなので、第3図1の土器は古い様相と新しい様相を兼ね備えている点で大廓式中段階に比定することが可能であろう。この土器と非常に類似しているものが埼玉県の諏訪山29号墳から出土している（註3）。ただし、こちらは口縁部外面の施文が棒状浮文ではなく、沈線である。なお、大廓式を出土している古墳はこのほかに埼玉県元島名3号墳（註4）、静岡県新豊院山2号墳（註5）などがある。千葉県内においては古墳からの出土例は今のところないようであり、類例としては八千代市ヲサル山遺跡D026号住居跡（註6）から1点、その影響を読み取れる資料が出土している。なお、他地域との併行関係において大廓式土器は奈良県纏向遺跡辻地区土壇4（5F8W）下層において纏向3式（新）と共伴し（註7）、かつて藤森榮一氏が提唱した下蟹河原式土師器（註8）に共伴している。下蟹河原式の土器は明らかに布留式土器の影響を受けている。

鉄製品 槍、剣1口ずつ出土し、切先の向きを逆にする出土状況は状態がやや異なるものの市原市神門4号墳（註9）でも確認されている。第4図1・2は共に身の長さが短く、古式古墳出土品としては典型的なものだと思われる。

銅鍔 無莖式と柳葉式が1点ずつ出土している。主体部での出土状況はやや離れているものの切先は同一方向を向き、槍・剣と同じ側に置かれていたものと推定する。第4図3の無莖式のもの注目すべき資料である。これまで無莖式銅鍔を出土している古墳は全国で9例あり、分布はすべて近畿以西の西日本である（註10）。多数の無莖式銅鍔を出土している京都府椿井大塚山古墳（註11）・同妙見山古墳（註12）のものとはやや形態が異なり、現在類例を調査中である。第4図4は柳葉式の縦一字鑄・無逆刺・無頸のもので銅鍔の中では最も出土数の多い形式である。県内での類例である木更津市手古塚古墳（註13）・長南町能満寺古墳（註

14)のものと比較するとかなり大形のものである。

玉類 管玉は共に細身であり、ガラス玉のなかにはコバルト着色の径8mmを超える大粒のものが存在している。細身の鉄石英製管玉は佐渡を原産地として弥生時代後期から古墳時代前期に北陸を中心に分布を示すものであり、近隣では木更津市請西遺跡群庚申塚第1号方形墳主体部(註15)、君津市大井戸八木遺跡001号土壙(註16)からの出土例が知られる。また、大粒のコバルト着色のガラス玉は椿古墳群内の他の後期古墳からの出土例はなく、SX-12方形周溝墓(弥生時代後期後半)主体部から9個腕輪状に連なって出土している。

4. まとめ

椿3号墳の概要を出土遺物に若干の検討を加えて述べてきたが、最後に本古墳の小櫃川流域における位置付けについて今後の研究の方向性と共に考えてみたい。

小櫃川中下流域の出現期から前期の主な古墳には、南岸に滝ノ口向台古墳群、鳥越古墳、やや南下して東京湾に面する手古塚古墳、北岸に山王辺田遺跡(II号墳他古墳・方形周溝墓群)、坂戸神社古墳等が知られる。しかし、未調査のものや本報告のなされていないものがほとんどであり、詳細な比較検討ができない。前方後円墳である手古塚古墳と坂戸神社古墳は墳丘長が60m前後と比較的小規模であり、100mを超す大型前方後円墳は中期の高柳銚子塚古墳の出現を待たなければならない。これは古墳時代前期におけるこの地域の勢力の散在した在り方を示すものである(註17)。

椿3号墳は、墳丘の規模的には滝ノ口向台9号墳(16×18.5m)とほぼ等しいが、滝ノ口9号墳が明確な陸橋をもつ点と群構成をとる点において異なる。椿古墳群の今回の調査区内には3号墳と同時期の古墳および中期の古墳もなかったことから単独で存在した可能性が高い。

県内において銅鏃が古墳との帰属が明らかな状態で出土している例は、前述した手古塚古墳、能満寺古墳のほかに沼南町北作I号墳から1点(註18)、市原市牛久古墳群(円墳・方墳)から1点ずつ(註19)ある。形式のわかるものでは手古塚古墳が柳葉式30点、能満寺古墳が柳葉式8点、北作I号墳・牛久古墳群円墳が腸扶柳葉式1点であり、

同一形式を複数有するものと最小単位を有するものがある。これに対し、椿3号墳は異形式を最小単位でもっている。銅鏃の保有が族長の族長権を示し、中央から地方首長へさらに族長へと分与、下賜されたもの(註20)とすれば、形式の異なる銅鏃は配布の時間差を示すものなのか、配布ルートの違いなのか、同時に違う種類のを配布されたものなのか、今後の研究にゆだねたい。

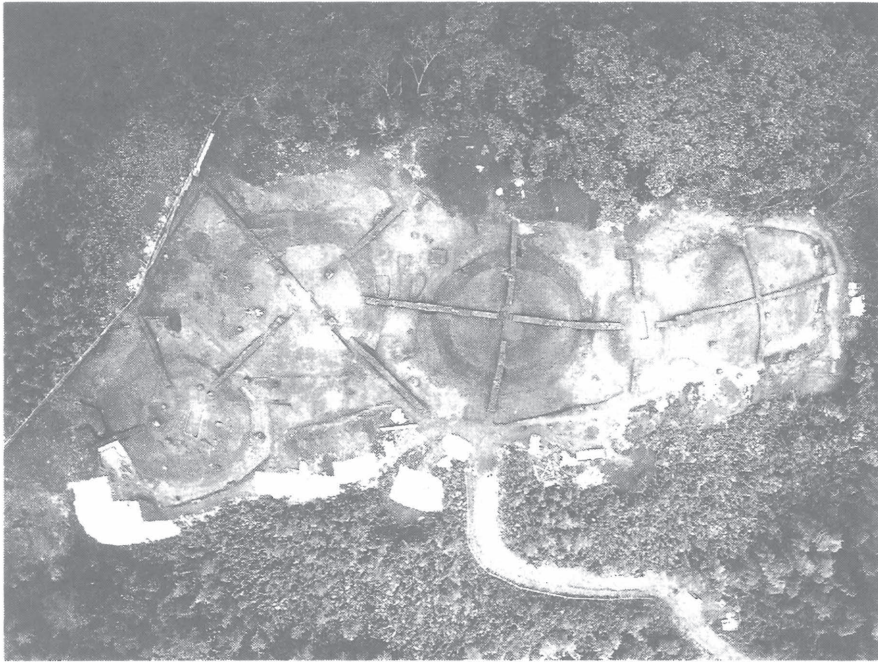
出現期から前期の古墳には非在地系土器の出土例が目立つ。当地域でも手古塚古墳からは畿内の布留式土器の搬入品、滝ノ口向台9号墳からは東海西部系・近江系、そして椿3号墳からは東海東部(駿河)系の土器が出土している。非在地系土器の古墳への供献は何を意味するのだろうか。手古塚古墳の性格について沼沢豊氏は「内部主体及び副葬品に見られる畿内の前期古墳そのものともいえる内容と在地産の供献土器をまったく伴わない点」から「手古塚古墳被葬者は、倭政権から派遣された人物と性急には結論はできないとしても、中央とのつながりの極めて強い、そのことが権威の基層をなしていた者と評価することができる。」(註21)としている。在地産の供献土器をまったく伴わない手古塚古墳はむしろ特種な存在であり、多くは在地の土器と非在地系の土器は供伴するものと思われる。高橋一夫氏の関東地方の前方後方墳から東海系の土器が出土することから、その古墳の被葬者を東海地方西部の地域から畿内政権の東国経営に派遣された将軍の墓である(註22)とする説もあるが、明確な前方後方形をとらず、東海東部の土器をもつ椿3号墳の被葬者はどう性格付ければいいのかだろうか。

古墳が政治的な構築物である以上、そこには当時の民衆を支配した権力の象徴が納められているものと推測すると、剣、槍という武器の副葬から読み取れる武力、鉄石英製管玉、非在地系の土器から読み取れる交易を背景とした経済力、そして銅鏃が示す中央とのつながりなどが浮かび上がってくる。そして最終的にその権力の大きさが古墳の墳形、規模に反映されてくるものと考えられる。よって、20mたらずの方墳である椿3号墳は小櫃川中下流域に点在する小地域の首長墓の一つであろうと現時点では予想される。

最後に高柳銚子塚古墳出現までの小櫃川流域の古墳時代前期の様相について古墳や集落を含めた

総合的な研究が進められるべきであり、本報告が

その一助となれば幸いである。



椿古墳群 2～6号墳 (左が北)

註

- 1 小高春雄 「君津平川線滝ノ口向台古墳群第9号墳調査概要」『研究連絡誌』第27号 千葉県文化財センター 1990
- 2 神野 信・加藤修司・沖松信隆「木更津市芝野遺跡における水田跡について」『研究連絡誌』第34号 千葉県文化財センター 1992
- 3 埼玉県史編さん室 『埼玉県古式古墳調査報告書』 1986
- 4 田口一郎 『元島名遺跡』 高崎市教育委員会 1978
- 5 磐田市教育委員会 『新豊院山墳墓群D地点調査報告書』 1982
- 6 千葉県文化財センター 『八千代市ヲサル山遺跡』『萱田地区埋蔵文化財調査報告書III』 1986
- 7 桜井市教育委員会 『纏向』 1976
- 8 藤森榮一 「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」『考古学』第10巻第11号 1939
- 9 田中新史 「市原市神門4号墳の出現とその系譜」『古代』63号 1977
- 10 川西宏幸 「儀仗の矢鏃—古墳時代開始論として—」『考古学雑誌』第76巻第2号 1990
- 11 近藤義朗編 『椿井大塚山古墳』『京都府山城町埋蔵文化財調査報告』第3集 1986
- 12 梅原末治 『山城に於ける古式古墳の調査』『京都府文化財調査報告』第23冊 1955
- 13 杉山晋作 「木更津市手古塚古墳の調査速報」『古代』第56号 1973
- 14 大塚初重 「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第3冊 東京考古学会 1949
- 15 木更津市請西遺跡調査会 『請西』 1977
- 16 君津郡市文化財センター 『年報』9—平成2年度— 1991
- 17 田中新史 「出現期古墳の理解と展望—東国神門5号墳の調査と関連して—」『古代』77号 1984
- 18 滝口 宏 『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)』 1961
- 19 石井 昭 「市原高校郷土研究クラブ活動報告(ア)牛久古墳群発掘概報」『市原地方史研究』第7号 1970
- 20 杉山晋作「古墳時代銅鏃の2、3について」『古代探叢』 早稲田大学出版部 1980
- 21 沼沢 豊 『古墳時代の研究』11地域の古墳 II 東日本 5 関東2 千葉P. 103引用
- 22 高橋一夫 「前方後円墳の性格」『土曜考古』10 1985